

2014 年度 センター試験 世界史B (本試験) 分析

全体概況

試験時間 60 分

大問数・解答数	大問数：4 題	解答数：36 問	
難易度の変化（対昨年）	○ 難化 ○ やや難化	● 変化なし ○ やや易化 ○ 易化	
問題の分量（対昨年）	○ 増加	● 変化なし ○ 減少	
出題分野の変化	● あり	○ なし	
出題形式の変化	○ あり	● なし	
新傾向の問題	○ あり	● なし	

総評

例年通り、テーマ史らしいリード文を用いながら広い範囲の小問を集めた形式を取っており、大問 4 題・総解答数 36 問という出題の分量も昨年と同じである。全体としては昨年小問 1 題であった戦後現代史が、小問 10 題と著しく増加したのは大きな変化であった。

出題形式では、昨年小問 5 題であった語句問題が、12 題と増加したことが大きな変化であり、その分、同時代を問う正誤判定問題が無くなり、全体として易化した印象である。他の出題形式としては、年表形式の問題が昨年の小問 1 題から 3 題と増加、昨年小問 3 題だった地図問題が 2 題と減少した。

大問別分析

大問	出題分野・テーマ	配点	コメント
第 1 問	世界史上の危機	25 点	小問 9 題中 6 題が戦後現代史からの出題で、さらに東南アジアの歴史まで問われる小問もあり、総合的な学力が求められる内容である。ベルリン分割に関する地図問題が出題されている。
第 2 問	世界史における家族や社会集団	25 点	中国・インドからドイツ・アメリカまで問われるセンター試験らしい幅広い範囲の出題。標準的な内容ではあるが、アメリカ労働総同盟の設立時期の正誤判定など、細かい知識も要求される小問も含まれる。
第 3 問	歴史上の国際関係	25 点	小問 9 題中 4 題が戦後現代史からの出題である。全体的にはヨーロッパを中心に問う平易な内容であるが、戦後の中ソ論争・ニクソン訪中・日中平和友好条約などの流れを問う問題、1990 年代に起こった出来事を問う問題など受験生の学習の隙を突くような難易度の高い出題も見られた。
第 4 問	世界史における過去の認識のあり方	25 点	メディナを選択させる地図問題が出題されている。また、地図で場所を問われている問題ではないが、第一次世界大戦前のドイツ植民地として、マーシャル諸島を問う問題が出題されるなど、細かな知識を要求される小問も見られた。全体としては平易な内容の出題であった。